

## 甲南女子大学蔵住吉物語翻刻ならびに解説

まえがき

。本稿は、山脇毅教授旧蔵、甲南女子大学図書館現蔵の「住吉物語」の活字翻刻である。

。同本は、図書番号九三―四一・S―一、縦二七・七センチ、横一九・二センチの美濃紙袋綴一冊本。表紙は鼠色、紙表紙、左上方に縦一八・三センチ、横三・一センチの朱の題簽を貼り、「住吉物語」との外題がある。前に遊紙一枚の後、二丁オより本文が始まる。内題はなく、一面十行、和歌は二字下げ一行書きである。書写年代は江戸時代初期、おそらくは寛文から元禄までのものであろう。墨付六十二枚、最後の六十三丁ウは五行にて終り、後に遊紙なく、奥書、識語の類も全くない。本文所々に同筆の書入有り、その中には「イ」あるいは「イ本」として、異本との校合たるところを示しているものもある。また、書本はかなり難読であつたらしく、所々に「まま」という註記も見られる。なお所々に虫食いによる損傷が見られるが、おおむね判読に堪える程度である。

。翻刻にあたっては、句読点、濁点などを付してはという意見もあったが、同系統の翻刻が全くない現在、出来得る限り原本に忠実

であることが必要と考え、あえて、句読点、濁点は付さず、行変えもすべて原本のままにした。なお丁変りは、「」2オのごとくにした。また、虫損の箇所は□で示したが、判読できる場合は「<sup>(イ)</sup>□」のごとく、右傍に付記した。なお、所々不審な箇所に関しては、翻刻者が「(ママ)」と註記し、原本に本来有した「まま」「まゝ」と区別した。

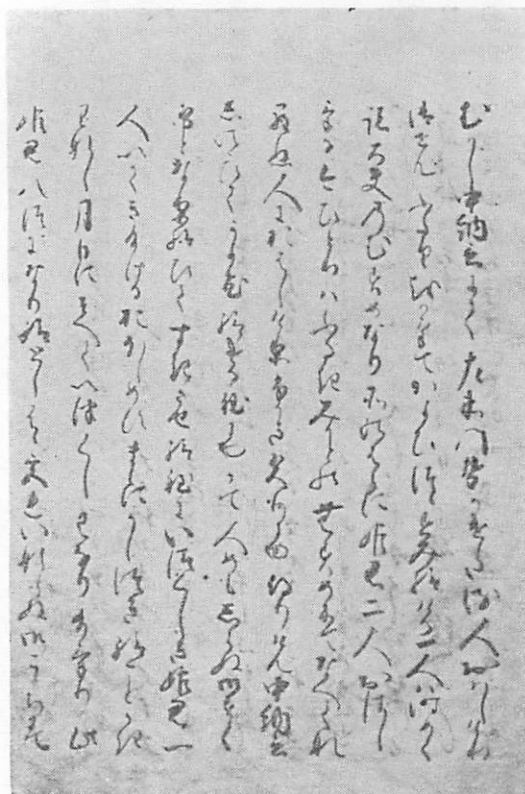
。住吉物語は甚だしく異本が多いが、この本が、その中でどのような位置にあり、どのような意義を持つかについては、桑原博史氏の解説を参照されたい。

。本稿成るについては片桐洋一氏の親切な助言を得た。また桑原博史氏には解説をお願いした。御多忙中御厚情をいただいた両氏にあつく感謝申しあげる。

(森 一郎)

甲南女子大学蔵住吉物語翻刻

森 篠  
原 百  
合 一  
子 郎



(甲南女子大学蔵住吉物語 冒頭の部分)

むかし中納言にて左衛門督かけたる人おはしけり  
御せんふたりをかけてかよひつゝすみ給ける一人は時めく

諸大夫のむすめなりそのはらに姫君二人おはし

ける今ひとりはふるきみかとのむすめにてなへてな  
らぬ人におはしけりふかき契りにや侍りけん中納言  
しのひてかよひ給ける程にやかて人めもしらぬ御すく  
せとなり給ひてすぎさせ給程にいつくしき姫君一  
人いてき給けるおほしめすまゝにかしつき給ことかき  
りなし月日にそへていつくしくなり給けり此

姫君八つになり給としはゞ宮れいならぬ御こゝちにて

いみしうなやませ給ふ日かすふる程におもくのみなり  
まさり給へは中納言に聞え給けるやう我はかなくなり  
なむのちこの姫きみの事はあはれなれなからんあと  
なりともなみ／＼ならむありさまさせ給ふなよいかにも  
／＼うちへたてまつり給へあのひめたちにおほし  
をとらすなよとなく／＼聞え給へは中納言もわれもま  
めやかに浮世にとまりのこらなんやとなけき給へと  
かひなき世はかりければはかなくもむしかかりに成  
給ふ中納言おなし道にとかなしみ歎き給へとかひ  
そなきさる程にその御跡ともさるへきやうにして

┌ 2ウ

四十九日も過ぬればもとの北のかたへわたり給ひぬひめ  
きみいとけなき御心にもよろつことのはにつけて  
もはゞ宮の御名残をおほしつゝかなしみ給に

中納言さへたちはなれ給へはいとゞつれ／＼かきりなくふた  
はのこはきの露いとひかぬる心ちして御めのとゞかくなく  
さめたてまつり過し侍程に中納言おはして見たて  
まつりかへり給へはなをしの袖をひかへてしたひ  
給ふをいとくるしくおほしけりいかさまにも残りの

姫君たちと一所に住せまほしくおほしけれとも今も

むかしもまことならぬをやこの中は心くるしき物にて侍る程に

御めのとものに住せ給ける御としかさなるまゝにひかり  
さしそふ心ちして見え給へは御めのと哀此御けし  
きを母宮にみせたてまつらはやと御くしをかきなて  
なくより外の事けなきそ敗あまりにも成給へはよろつ  
おもひ知給ふにめのと中納言にきこゆるやういとけなく  
おはします程こそとてもかくても侍へけれこの  
姫君の御事いかにとわするゝ隙なく中納言に申せば  
われもわするゝひまもなければとおもふにかひなき事  
のみしけくてこそすき侍れさりなからむかへてつね  
にみたてまつりなむかみな正月の十日とさたためかへり

┌ 3ウ

┌ 2オ

┌ 3オ

給ぬすてにその日にもなりぬればむかへ奉り給ふに  
今二人の姫君たちとうちかたらひておはします

を中納言とのはいとうれしとおほしける中の君

三の君もめやすくらうたくおほしけれともひめ君には

ならふかたなし御年はひめ君たちには二まさりにて

侍り姫君御めとの子にしうと申女房こゝろさま

よりはしめてあかつかつマはしくてさすかにくちをかし

くもなといひければあらまほしきさまなり

此姫君にかた時もたちはなるへき事を物うきこと

におもひてあかしくらし給ける中納言のにし

┌ 4オ

たいしつらひてすませ給ふむかへはらなる事のき

みにはひやうゑのすけなる人かよひ給ふ中の君

三のきみもいとなつかしき御ありさま御めのとこ

宮のおほせさふらひし御宮つかへのこといかにも

わするゝ時なくおとろかし侍ければ中納言われも

をこたるときなけれとも北の方に申あはせむに

わか子ならねは同心におもはむ事のありかたくて

よろつ心くるしく思ひわつらひて月日ををくる

程に右大臣なる人の御子に四位の少将とてなへ

てならぬ人おはしけりいかにもおもふさまなる人も

┌ 4ウ

かなとおもひ給ふにその御うちにはしたもののそらさへ  
といひけるかとしたけて下つかへにきてちく

せんと申けるか中納言のひめきみのはゝ宮の家の

下つかさにて大夫といひけるかめにて侍ればあさゆふ

ひめきみをみまいらせて右大臣の家のきたのかたにて

人のよきあしき物かたりの中に中納言の宮はらの

姫君こそおさなくてめてたくふたはのこはきをみま

いらするやうにおほせしかいかにいつくしくおはすらん

はゝ宮はかなくならせ給て後四五年はまいり

よらすと申せは少将たち聞給てちくせんをめてみ

┌ 5オ

るらんやうにさもある人はあれとも物うくてすくす

也中納言の宮はらの姫君みたてまつりしにやと

の給へはちくせむおとこにてさふらひしものゝはゝ宮の御

うちに候ひしかよくみまいらせていつくしくおほせ

しか中納言は御宮つかへと御さためにて侍るよし

うけたまはつてさふらふまゝはゝにうちあはせ給ひておほ

し歎くとこそうけ給て候へと申せは少将その御かたへ

いひよりてふみなとつたへてんやとの給へは御かへりこと

はしり侍らす御ふみを給てと申せは十月のころにやもみち

かさねのうすやうにて

┌ 5ウ

初時いまだ雨あめけふふりそむる紅葉の色のふかきをおもひしれとそ

かきてひきむすひてちくせんにとらせ給ふその日のくれかた

中納言とのへもちてまいりければ人々めつらしみあへ

るなかに侍従あなゆゑしいかにおもひて参り給ふにや

と申せははかなきことのみしげくさふらひて心ならずいま

まで参らさりつるわれなからつらくおほえ過へき

候としより候へはむかし恋しく侍りて人々をも

見奉らんとてなとまいり候と申せはひめ君いと

哀あはれき給ふさても心さまにちくせん侍従かたらひて

右の大いとの御子に四位の少将と申人の文にて

侍るかやうの御ことははかり侍りなからやむこと

なき人のいたくおほせらるゝほとにいなみかたくてまいり

侍ると申ければよとおおもへともかくの給へはとて御文を

ひろけつゝ姫君の御そはにさしをきかくなむと申

せは御かほうちあかめてとかく物もの給はすこととはり

とおもひつゝしうちくせむにかくなむといへはちくせん

立かへり。しますそとゝ給へはまことにかたはらもひかる

程にいつくしき御有さまにて御ことかきならして

おはしましつるところにまいりてそのむかしの事

とも人々にかたり申せはは宮の御事なけき給ひ候

6ウ

し御けしき申はおろかなりをみなへしの露おもけ

なるけしきにてまかきの程にうちなひきたる心ち

してその事となくおいとをしき御ありさまにそ

のたもとまでも所せくと申せはいよゝ心そら

にてはしめはさのみこそあれこの事かなへなは

此世ならずおもひ侍なむとの給へはとしよりさふ

らひてはかやうの事すきしきやうにさふらへ

とも君のかくまておほしたる御事なれはいかてをろ

かにおもひたてまつるへきと申ければよろこひて

かくなん

浜千鳥あとはかりたにしらねともなを守みむしほのひるまを

ちくせん侍従にきこゆれはいさやかやうの事はならはせ

給はねはいみしくわひしき事におほしたる

ことのいとをしきになといへはちくせんいやしきことな

らはなにしに申候へきおほえすくなき御宮つかへ

よりはこの公達におはしまさは中々御こゝろやすき事

にてこそ候へうけたまはるやうにてはその御宮つかへの御こ

ともかたくこそこの少将とのは今この後の御せうとにて

右のおとゝの御子なれば御かたちよりはしめてなには

のことにつけてもひとしき人やはおはする御ためう

7ウ

6オ

7オ

しろめたき事をはよもさふらはしと申せはいさや  
中納言とのもひとへにうち参りの事より外にの給

はすなみくならんさまにおほしよらむことはよもといへは

姫君うれしと聞の給へりちくせむせめて一くたりの

御返事にても給てと申せともかやうの事もならばせ

たまはねはとておほしはなちたるさまをみてまり

つゝありのまゝにこまゝとしたり聞ゆれば少将さこそ

あらめと聞給へともたゞ猶々も聞えさせよいかなるへき

にか此事すゑとをらすは世にあるへしともおほえす

との給へはいとおしくてそのうち日々にゆきてとかく申せ

とも行水にかすかの心ちして御返事なし

御ふみあり心ふかくあはれなり

立かへりなをそうらむるつらしとも思はつへき身にしあらねは

ちくせん侍従にきこゆればなみくの人にもおはせずあ

まりに御心ふかくと申せともわれはしらぬ事なりとの

たまへは申わつらひてたちぬ日かすふるまゝにまゝは

此ことの聞て筑前をよひてこの程たいのきみへ

ふみつかはすなるはいかなる人そとゝひ給ふにしはしは

とかくあらかひ侍るにあなかちにとはれければありのまゝ

にしかくと聞ゆればまゝはこれ聞いての給やう

┌ 8オ

└ 8ウ

さやうの公達の人にいたはられんとこそものし給ふへき  
にはゝもなき人よりも三の君のねかひまさり給

たるにさるへからん事とおもふによきほとにはからひ

給へかしさらはそこをこそこのよならずおもひ侍ら

めとあまりに心ふかけにの給へはさすかに筑前いなみ

かたさにまことにたひく聞え侍れとも御返事も侍ら

す少将殿ちくせんをのみせめさせ給ふもわりなく

侍るさりととも又のちまで申かなえんこともかたく

侍れはさやうにもさうそはならひ侍らんと申ければ

よろこひてしろきこうちき一かさねこれは三の

君よりとて出し給ひければよろこひてさらは少将

殿へはもとの御心さしの人とこそしらせ奉らんと

申せはよくの給ひたりそのよしにてこそとよろ

こひ給けり其のち筑前少将とのへ参りて申てん

ことはありかたく侍れと今一と御文を給て聞え

て見んといへはいとよろこひて

よとゝもにけふりたえせぬ富士のねの下の思ひやわかみ成らん

とかきて筑前とりて少将との御ふみとてまゝはゝにたて

まつれば多みまけてうつくしくもかき給へる

物かなこの御返事し給へいまやうはよしはまぬ

┌ 9オ

└ 9ウ

事そとの給へは三の君たはかられることをはしらす  
うちそはみたる御けしき姫君ほとこそおはせねと  
もいとめやすくいとをしきさまなりすゝりふてと  
りよせてそれ／＼との給へはいとはつかしけにて  
かくなむ

富士のねのけふりとぎけはたのまれすうはの空にや立のほるらん  
とかきてうちをき給ふを筑前とりて少将とのに御返と  
て聞ゆれば少将たはかりたるもしらすうれしと  
おほしていそぎあけて御らんすれはいみしからす手なむ  
とおさなひ<sup>(ママ)</sup>れてみえけれともよろこひ給ふこと

かきりなしたひ／＼御ふみなとかよはし給ふをたい  
の人々このよしほの聞いていとをかしくおもひあへり  
かくしつゝいく程も日かすもつもらてかよひ給け  
る少将何心もなくそすくし給けるおさなき  
さまもことほりとおもひつゝひるもとゝまりてみ給  
へはきゝし程はあらねともなへての人にはことなりと  
かよひ給けり中納言もたはかるやうをもしらす  
少将殿よろつひかおはし給ふまゝはゝかしつき  
給ふことかきりなしわかおはしますしんでむの  
ひんかしおもてにすませうてまつりければ少将殿のすき

┌ 10  
└ ウ

┌ 10  
└ オ

さまにゝしのたいを見給ふによしあるさまなりいか  
なる人のすみ給ふにやとあやしくゆかしくおほして  
あかしくらし給ふに少将秋のよのつれ／＼なかき  
ねざめにななく物あはれなるさまなかにねやち  
かきおきのうは風そよめきわたる折しもいと

はた寒きたまぐらのしたによもすからなくぎり／＼  
すのこゑもそのことゝなく涙をさへかたきつまと  
なるおりふしつまをとやさしきしやうのこのね  
そらに聞えければあなゆゝしこはいかにと思ひ  
てむねうちさはさまぐらをそはたてゝ聞給ふに西の

たいに聞なし給ひける日比よしありて見えつる  
かといよ／＼いかなる人すむらんとときゝ給ふにわれはしめ  
かたらひそめし人こそことを引と聞しかとおほしいてゝ  
三のきみにこれを聞給ふにやとの給へははしめより哀  
に聞つとの給ふに心あるにやとおもほえてこれはいか  
なる人のことのねとゝひ給へはわかあねにて侍る人の  
ひき給なりとの給ひければ兵衛のすけのやとゝひ  
給へはさにはあらす宮はらのひめきみなりつね  
に心をすましてことをひき給なとなに心もなく  
かたるもいとをしくおもひなから心のうちにはあさ

┌ 11  
└ ウ

┌ 11  
└ オ

ましくたはかられける物かなとおもひつゝたいの方にいかばかりをかしくおほすらん筑前かほいなさとおもひつゝ明もやらぬに出て給ひてちくせんをめしうらみ給ふに申やるかたなくくるしけにてたちぬ今はいふにかひなしなをしらぬかほにて過ぎむあのあたりに聞えさすなどの給へは筑前かほうちあかめてなにかとそ申てたちぬ少将は三の君をも哀にはおほしなから思ひそめてしことのみすゑなからんのみにあらずさしも聞えありし人たにもかほとこそ侍れましていかならんとゆかしくそ

┌ 12オ

おもひ侍けるよそなからも見奉らはやとおもひわひつゝ冬にもなりぬ侍従にいかてか物いはんとおもひておほしめすほとこの事をかきつゝなをしのこしにさしはさみて雪のいみしうふりたるにたゝすみありき給ふたてしとみのもとに立よりてたちきゝ給ふにはしちかくいざり出給てをかしき四方のこすゑかないつれを梅と分かつたきころといひてうちはらふ中にはすこししのひたるこゑにてことかきながらしてかひのしらねをおもひこそやれとほのかにいひ給ふこゑ姫君かとむねうちさはきしのひかねつゝたて

┌ 12ウ

しとみをうちたゞけは侍従あなゆゝしたれなるらんとみれば少将たち給へり侍従あさましくおもひていそぎかへらんとすればものすそをひかえてむすひたるふみをやり給ふよろつ人めつゝまじさととてかへるあやしいかなる文やらんとみればはしめよりいまゝての事をこまゝとくゝれたり

白雪のよにふるかひはなけれどもおもひきえなんことそかなしきかゝる身は消もきえなむ白雪のよにふればこそうきめをもみれとてひめ君にこれを聞ゆればさすかにあはれとおほしなからよそなりしそのかみさへおもひよらずまして

┌ 13オ

今は人聞見くるしゆめとそその給ひけるかくしつゝはかなくもあらたまのとしも立かへりて正月十日廿イあまりの比にや中の君のたまうやう今やさか野のゝへの春のけ色いかにおかしかるらん忍ひつゝ見てなどいさなひ給へはをのゝまことになといひて出たち給ふむつまじき人々はかり御ともにまいりけるあしる車三りやう一りやうにはひめ君今一りやうには中の君三のきみ一りやうにはきぬのつまきよけにいたしていみしうわかき女房はした物なとのりたりけり少将ほの聞てさか野へさきぎに行て松はらに

┌ 13ウ



かくれるて見給へは此車ともちかくやりよせて立て  
ならへたりさうしきうしかひなとをほとくの

けてさふらひ二三人はかりちかくよせて女房はし  
た物なとくるまよりおりて小松ひきむすひつゝ姫

君たちの御車のすたれをあげたりたしかならねとも

ほのかにみえ給ふ少将よくかくれみてみ給ふをはしらす

女房たちいとおかしきのへのけしき御覽せよかしさま

くくの草なともえけるもなつかしくなと聞ゆれば中

の君おり給へり紅梅ねかきのうへにこきあやのうちきあをき

おり物のひとへに御はかまふみくゝみさしあゆみ

給えるさまいとあてやかにみえ給ひけり御くしはう

ちきのすそにひとしかりけりつきに三のきみ

おり給ふ花山吹のうへにもえきのうちきくちはの

ひとへき給ひて御くしはおなしくあひきやう今

すこしまさりてそ見え給ふ姫君はとみにもおり

給はぬをめむくゝいかにとの給へは侍従さしよりていかに

人をおろしまいらせて候へきわたらせ給へと申ければのへ

にも人やみるらんとわひくゝなからさすかにかたへの人の公

達たちに心をかれしとおほして時ならぬ藤かさねのうへ

にくれなるのうちき紅のひとへはかまふみしたきてさし

┌ 14ウ

あゆみ給ふ御けしきこよなうらうたき御ありさま

いふもをろかなり御くしはうちきのすそよゆたかに

あまりてゑにかくともふてもおよひかたしまみ口

つきいとあてやかにこと人よりも今一しほ匂ひく

はよりてそ見え給へはこれを人にみせはやおとろ

かれ給ふをのくゝ人ありともしらてあそひあへる

を少将よくくまほりみ給ひて世にはかゝる人も

おはしますとおとろかかつゝ心も空にあくかれて

大なる松の下にかくれ給をこの姫君折ふしみつ

給てかほうちあかめあふきさしかさしいそき車に

のり給ふさま心ありけなりこれを御らんしてみなく

さはきてかくれあへるけしきいつれもあらまほし

けなりかくて少将車のきはへ立よりての給ふやうさか

野くけしきゆかしさにあそひつるほとにくるまの

音のし侍つればあやしやたれにかとて立忍び

たるほとにかくれたるしんあればあらはれたるしと

かや参りあへるうれしさよかやうの御ともにくせられ

ぬ事うちめしてなどの給ひて

春霞たちへたつれと野へに出てまつのみとりをけいまいふみつる哉

とてさすかひめきみの御心さしとはの給はす一二ところの

┌ 15ウ

┌ 15オ

中への給へりければ中の君はひめきみにこれを

と聞ゆればそなたにこそとの給ふ程にたかひにいひ

かはし給て中の君

かとおかの松ともしらて春の野たわいてつらん事そくやしき

少将いとおしくおほして

君とわれのへの小松を上そにみてひかてやけふ立かへるべき

との給へば此たひは御かたにこそとの給へは姫君よしなき

ありきしてとおほしてうちそはみておはするをとく

の給へは姫君

手にふれてけふはよそにてかへりなむ人みのおかのまつつらきよ

せうしやうたへかたくてよつはひめきみにとおほせとも

返し給はねとも又かくなむ

年をへて思ひ初てし片岡のまつの緑は色ふかくとも

中のきみ

ひとまなき松の緑にいかなればおほひ初つゝ年をへぬらん

三のきみ

千世までとおほひ初ける松なればみとりの色はふかき成けり

かやうにいひかはす折しも燕のなくをきよて中のきみ

我宿にまたおとろへぬ燕の声するのへになかはしぬへし

三のきみ

└16ナ

初声はそそめつらしき燕の囁のへなるといざかへりなむ

ひめきみ

めつらしき初音をそ聞燕のかたらふのへに目をやくらさん

せうしやう

初無こゑはけふそきよつる燕の谷たちいていくよへぬらん

どいひけち給ければ少将いよしひかたきにくるまの

きはにたちより給ひてあくかれきせ給らんかひも侍らし

と聞ゆれば中の君車よりは少将殿の一所こそおきせ

給つれよの人はいつかはしりたりかほにもの給

物かなといへは少将うちわらひてゆしき御物あら

そひかないかななるよめにもこそはしるく侍なれ御うち

きよきよいかに兵衛のすけとのに物あらかひのある

らんうしろめたきこそなとたはふれ給ひけるも

てひめきみにこそとけしきは見え給ひにけり少将

とのたひへ歌よみ給なとしまひけりきても

目くれぬればみなへ揃り給ひて少将への御よそなから

身にそひたる心ちしておもひはなれかたく心のうちも

くるとしきまよにさすかに侍従にあひてかやうにあき

ましく人になはかられてかゝる物おもふことのくち

をしさよいかにおかしとおほしけんきみもうせ

└17ナ

まほしくおほしけれともさすかにすてやらぬうき

よにてこそとてうちなき給ふ文かきつゝこれ御覧

せさせよなどたひくゝの給ひければ侍従そのむかし

たにも申わつらひし事なりまして今はかたきお

ほせにこそといへはなざけのみちはさのみこそあれわか君

一たひの御返事を給たらは此世の思ひてにこそ

と心ふかけに聞ゆればそれもいかゝとおもへともいとを

しさに文とりてたひくゝほのめかしければあり

しそのむかしさへつゝましくて過しつるなり

いまはまして人きゝみくるしわれなんあさまし

さとの給へは侍従そのことはり斗は申侍れともあなち

におほしなげく御いろふかくこそと申わつらひて少将

にしかくときこゆればしらぬ山路にも行かくれんなむと

おもへともかくまでおほしもしらぬ物ゆへに袖のみしほり

かちにてちかきほとは姫君もきゝたまひてあはれ

とおほしなからかたくよしなしとおほせらるゝをほの

きゝ給ひて御心やるかたなくて少将

哀ともいふことのはのあらはそしはし涙のおちもとまらめ

侍従きこえわつらひてかくなむと申せはうちなき給て

人のけしきちかければたち給ひぬ四月にも成ぬれば卯の

18ウ

花折て少将

つれなきをおもひもらさぬ心こそ身を卯のはなといふへかりけれ

しゝうにかたふたはつてふれ給ひつゝ身もあへぬ御けしきあはれ

つくしかたしある時はのきはによをあかし又かくなむ少将

白浪のよるくゝことに立よればよするなきさのなきそかなしき

かくしつゝ五月にもなりぬしやうふかさねのうすやうにて

しゝうもとへしやうふつりすとて少将

心さしふかきぬまゝくゞ尋つゝひけるあやめのあとのねをみよ

しゝう御返事はかりはと申けれとよのつゝまじごとなけ

き給ふざるまゝに少将おもひかねて神仏にいのり給ける

三の君のもとへもゆかまほしけれともおもひあまりて

は侍従にあひてこそ心をなくさむれにしのたいの

気色をたゝみすなりなんこときうくてつねはかよひ

ければよひあかつきにたいをすぎ給とてふるき歌のいと

哀なるをおかしき後にてうたひつゝ袖のしほるはかり

にてすぎありき給ける後かくしつゝあかしくらすほと

にひめ君のめのとれいならす心ちおほえければしゝう

もさとへいてにけり少将もいよくゝよるかたなくて歎き給ふ

御めのと日をふるまゝに心ほそくおほえければ姫君のゆかし

うおはしますにたちよらせ給ふへきよし侍従かもとへいひ

18オ

19オ

やりければしのひつゝおはしたりければ御めのとをき  
出なく／＼聞ゆるやうさためなき世と申なからおもひ  
ぬるものはたのみなくなむつねよりもこのたひはきみ  
も御ゆかしくてかゝる心のつきぬれは見奉らん事も  
このたひはかりにやなとなきかなしみければ姫君御  
なみたせきあへす母宮のおはせざりしをこそか  
なしみまいらせしに又我さへはかなくなりなは  
たよりなくおほすらんともかくもさたまり給はむを  
見奉りてのちこそとおもひしにこれをみをき  
奉りてしての山をまよはむことこそかなしけれ

┌ 20  
オ

はかなくなりなむのちは侍従をこそはかたみとて御  
覽せさせとて御くしをかきなてゝさめ／＼となき  
ければはひめ君も侍従も袖をかほにをしあてゝ  
われもともにくし給へいかゝせむとこそおもしろのはすなき  
給ければよそのたもとまでも所せく聞えけるさてしも  
あるへきならねは侍従をはきてかへらせ給へきよし  
聞ゆればかへり給ぬ日かすふるまゝにをもてなりて  
五月のつこもりにはかなく成ぬひめ君は御めのとのお  
もかけみにそふ心ちしてこみや御恋しくおもひ奉る  
にも御めのとにてこそなくさみつるに一かたならぬ御な

┌ 20  
ウ

けきせむかたなくそおほしけり侍従かおもひさこそあ  
るらめとめのとのなけきのうへにしゝうか心くるしさ  
おもひやり給侍従ははゝのかなしみの中にひめ君の  
御つれ／＼一かたならすかなしみつゝさてのち／＼の  
わざもこま／＼といとなみけりひめ君のつねにき給ひ  
けるうちき一かさねしゝうかもとへつかはす□<sup>エ</sup>て

唐衣しての山ちをたつねつゝわかはくゝみし袖をとひ南<sup>は、ヤイ</sup>  
とつまにかきつけてやり給ければ侍従これを見て  
かたしけなくおもひかほにをしあてゝ御こゝろさしの  
ほとなみたせきあへす人めもつゝまさりけりとかくいと

┌ 21  
オ

なみ侍ほとに七月七日<sup>ナイ</sup>ころ四十九日過ぬれば君のもとへ  
参りけるいつしかはつ秋の月いとあはれなるにはし  
ちかく出給ひて世中のはかなさむつましき人／＼に  
わかれぬることをうちかたらひて御かうしもおろさてな  
めぬたるをよふけかたに少将何となくた□<sup>チ</sup>よりて聞給ふに  
姫君の御こそおもしろし給ひ又侍従か声もきこゆいと  
うれしくて立きゝ給ふことをしのひやかにかきならし  
あはれなりしことを二人打かたらひてなき給ふけし  
きなりとふらはむとてしとみ打たゝけは侍従あやし  
けにみければ少将なりさても御なけいきかはかりならん

┌ 21  
ウ

ものおもふはかなしき事とはこの程こそおもひしられ侍れ  
われも草の露きえもやられてなといへは姫君うるはしとて  
きてうのうちにいり給ふ少将なけきつゝこよひくまなき  
月なとうちなかめて

かくはかりさやかにてらす秋のよの月よりさぎにいる人そうき  
いる山のはもつらくとの給へはさすかにをかしくおほす月  
かけさやかなれは少将

天の原のとかにてらす月影をよなく君とみるよしもかな  
との給へは御返事もなし（は）こそは侍けめあなあはれ  
なといひかよはす程にさよもなかはに過てかねのおと聞え

（是定）無  
ければ侍従打なきてあかつきのかねのをとこそ聞ゆ

なれと申せは少将殿とりあへすこれを入あひとおもはま

しかはとうちなかめ給ふを姫君もあはれと聞とかめ

給けるさてよもあけゆけは人めつゝましとて御うへの

かたもおほせてかくり給ひぬしゝうひんなき御さまかなと

申せは少将

たえなむと思ふ物から玉かつら袖にかけてもくるとしれなん

御かたにおはしてうちふし給へとも御めもあはすほのかなり

しおもかけ恋しくてなかめふし給ふ姫君もさすかにあ

はれとおほしてしゝうとかたならひてあけぬれは文あるとりて

御覽すれは

よそのけしきを 夢はかり みるにつけても

あふことを 秋のよすから つくく〜と

思ひなけきて あかせとも 君をみるめも

なききにて 明行かねの おとつれば

あはてはなれし ありあけの 鳥の鳴ねに

つらかりし なけき〜て 見てもなを

あふくま河の 名のみして 涙のさこそ

をきあへぬ つらきながらに 恋しさも

おもひもいまは かつ〜に 一かたならす

なけくまに あはれくるしき ころかな

人にはいはて ころには ちつかに物を

おもひつゝ あげくれなはと かくてのみ

すくるをみるそ うらめしき さりともしきは

しるしめや さこそ人めを はゝかりの

せきに心を とゝむとも いとをしとたに

さゝかにの いふことのほ なかるらん

契りそつらき もしほ草 見えしも夢の

こゝちして こひしもなとか うつゝにて

かくはくるしく おもふらん あらいそかみの

┌ 22  
└ ウ

┌ 22  
└ オ

┌ 23  
└ オ

┌ 23  
└ ウ

なみまこそ おふるみるめも 我はかり

いとかく物を よとともに 思ひみたれて

あらしかし あふよりほかの しからみそ

なみた河とは なりにける 袖のいせきも

朽はてゝ いまはをきふる かたそなき

とうつくしき御手にてかきみしたる水茎のあと

まめやかにあはれにて侍従この御返事は候へかしと

申ければつゝましなから

人しれぬ心のうちの忍草涙の露のをかぬまそなき

しゝうとりてまいらせければむね打さはき世中もいつしか

そむきかたくていのちもおしくとてまことにうれし

けにて御ふみあり

秋の野々草葉よりなをあさましく露けかりける我袂かな

とてあさからぬ聞えければあまりに人の心つよきも哀を

しらぬさまなりとすゝめまいらせければあはれとおもへ

とも人めのつゝまじさにこそとて

秋の上に  
朝夕に風をとつるゝ草葉より露のこほるゝ程を見せはや

とかきてうちをき給ふを侍従とりてかくなむ

ゆかりまで袖こそぬるれむさしのゝ露けき中にいりそめしより

とかきそへてまいらせければ少将うちみてうれしきにも

┌ 24  
ウ

むねさはきて一こと<sup>は</sup>の御かへり事によの中のそむきかたく  
侍従の心のありかたさよとて

むさし野々ゆかりの草の露はかりわかむらさきのなさげ有せは

なといひ返しけるかくしつゝ月日すくれともむなしく

き<sup>す</sup>えもゆけはいよゝおもひまさり御宮つかへもわすれきえ

もうせまほしくおほしければたゐのかたにたゝすみ

給ひて見給へともおろしまはして人かけもなしこゝろ

ほそくて御かたのかたへおほしければ三の君何心なく

うちとけておはすさすかあはれなりかきたえなはいかに

なとむつましく物かたりし給ふに宮つかへも物うくてふかき

山にも入なむとおもへはいかにもおほしいてんやとうちかたらひ

給へは三の君まことならはいかはかりかなしかるへきと打

なけき給ふざりとも時くはま<sup>り</sup>いなむさまかはりたりと

もうとましとおほすなよとかたらひ給へはなみたにくれ

てなきふしたまふさすかにいとをしくおもひその日は

かたらひく<sup>く</sup>したまひぬあけ行はいて給ふなをしの袖

をひかへて三のきみ

たまさかにみちくるしほの程もなく立かへりなむことそかなしき

としたにほめかしたまふもすてかたくて少将のたまふやう

なにとなく世中の心うくのみ侍れはふかき山にと思ひたつ

┌ 25  
ウ

にその時おほし出なむやとのたまへは三の君いかににゆへにさることは侍るへきたまさかになちつけ侍るたにも心うくこそましていかにあはれにかとてつねよりも心そとけになき給ふさま哀なりまことやあらましことそとてとかくなくさめあかしてさまにたいの方へたちやすらひて

君かあたり今ぞ過行いてゝみよこひする人のなれるすかたをとうちなかめ給ふを侍従きゝてまとおしあけていかにと申せは少将世の中のうさのみまさりゆけはふかき山ちにおもひ入なむとのたまへは侍従あなとうとやさらはみちひき給へと申せは少将けにも一ねむすいきとこそ仏はとき

┌ 26 オ

給へましてむさし野々草のゆかりなれはおなしはちすかとのたまへはうれしき善知識にこそとたはふれけるも忘かたくこそ侍れいまこそわらひ給ふとも哀とおほしいつることもありなむものをとかくしつゝあかしくらすほとに九月にもなりぬ中納言北の方にのたまふやうゆくすゑはしらす二人のむすめはありつきぬこのたいの君をこしの五節にうちへまいらせはやおもふなりおなし御心ならぬ心うさよとのたまへはまゝはゝわか子たちにおもひましたまへるをねたしとおもひながら申やうなかゝおほえすくなき宮つかへよりもときめくかんだ

┌ 26 ヲ

ちめなとにあはせ給へかしのたまへは中納言なみくならん人にはみせむことはあらしとてなとのたまへはまゝはゝともかくもはからひにてこそといひなからまゝはゝともいとなむけしきにてしたにはいかにしてあやしき名をたてゝおもひうとませむとおほしけり

中納言霜月の事なればこの事のみいそかるゝにわか子ともにはまさりてあらむことをそねみ人わらはれくさになさむとおもひ人しつかなるときに北のかた中納言に聞ゆるやう申せははゝかりあり申さねはうしろめたき事なり此たいのきみをもわかむすめたちにもをとらず

┌ 27 オ

すくれてもおほせよかしと人しれすおもひ侍にこの八月よりの事を露程もしらすありつる事の心うさよとてさめくとなきければ中納言こはなに事そいかにくくとひ給へは六かくたうとかやあさましき法師ひめきみのもとへかよふなるこのあかつきもねすくしけるかたいのかうしをはなちて人のみるともなく出にけることの心うさよとてもしいつはりならばほとけかみも御らんせよとけにくしくのたまへは中納言よもさる事はあらし女房たちの中へそかよふらんとしたまへは中のかうしをはなちて出けると申うのは空なる事はいかて

┌ 27 ヲ

御みゝにいれ候へきとのたまへとまことしくもおほさすまゝ  
はゝ三の君のめのとに心むくつたりける女房にい  
ひあはせつゝこのたいのきみをわかひめ君たちにおもひ  
まし給へる事をねたきことにおもひとかく申せとも  
かなはねはいかゝすへきとのたまへはむくつけ女われらも  
やすからす思ひまいらせつるにうれしくもてさゝめ  
きあはせてそのゝち二三日ありてあやしき法師を  
かたらひたいにいれをきて中納言に聞ゆるやうはいつ  
はりとおほしたりしたゝいまかの法し出るを  
御らんし候へとのたまふにふしきやとみ給へは出にけり

28オ

あなあさましやおさなくてはゝにをくれ又めのとさへ  
はかなくなりしかは哀れくわほうわろき物と思ひ  
なから心うやとて入給ぬまゝはゝしゝたる心ちしてむく  
つけおんなもなつみあへりさて御宮つかへの事はおほし  
とまりぬ中納言はたいにおはしてみ給へは姫君なに  
心なくの給へりこなからもあはれにいづくしくみえ  
給ふにあさましき事をきゝ給へはまつ御なみたそもれ  
いつるこみやのおほせし事をたかへすうちまいりの事思ひ  
いそぎつれともとのたまへは姫君も侍従も何事にやとむね  
うちさはきけり中納言たちさまにしやうをよひてあやしき

28ウ

ことを聞つる程に内まいりはとゝまりぬとのたまへはなに  
事なるらんとむねうちさはきとかく申事もなしさても  
何事にかとおほゆる程にしきふといふ女房のたいの方に  
心よせなるをめして中納言とのゝしかくゝとおほせら  
れし事はなにときゝ侍ると思ひければしきふすゝみても  
申たくは候つるに世の中のつゝまじさにいままで申さゝり  
つるうれしくとてきたのかたしかくゝの事をたはかり給ふ  
なりと申せば侍従打さわきてひめきみにしかくゝと申せば  
きぬひきかつきてふしはゝなるらむ物はよにはなから  
ふましき物なとふたりなきふしたまふこの事う

29オ

とき人にはきかせしあなたこなたのうき名なり人  
きゝ見くるしとそのたまふ少将内まいりは一ちやうときゝ  
給ひ候はせむかたなしもあはるかにきゝなしまいらせ  
候はむかなしさよとなげきつゝやすき事はねをのみなき  
てつねは侍従にあひてなき給ふいはむかたなし姫君も  
さすかにあはれにいはむかたなし又少将しやうにさても雲  
ゐはるかにきゝなしまいらせんかなしさよとそてしほり  
あへすかくなむ

雲の上に立のほりなん鳥の子のあとばかりもやかたみとはみん  
姫君よのうさに思ひいりつゝみゝにもいれ給はすしやうむ

29ウ



けになさげもしらぬやうにさふらへはこれはかりはと申ければ  
いかにもなりなむ後はおもひいてにもとおほしてひめ  
きみかくなむ

かひもなき我身と思へは鳥の子の雲のうへにも思ひたゝれす  
よしなき物おもひにしつみぬるよと御袖をかほにおし  
あて給ふしう人めつゝましくてたちけるせうしやう

いかにせむ逢坂山をしらぬ身のたゝこの道にまよふはかりを  
御返事なしいまとも御こゑをきゝこのよのおもひてに  
と人しれすしくれひまなきにもみちかさねのうすやうに

紅に木ゝのこのはうつろへとわかことの葉の色はかはらす

┌ 30  
オ

ひめ君はよのうさに御みゝにもいれ給はずしうことはり  
なから少将殿の御心ふかくおほしいれたるもいたはしく  
侍るに御返事はかりはと申ければつゝましなから

我身こそ木ゝの木の葉にたとへつゝ吹らん風に散ぬへき哉

少将殿はいとゝおもひにまさりてしのひかたしさて中  
納言殿は内まいりこそとゝまりぬともさもあらん人に

みせ奉らはやとおほすうせ給ひし内大臣の御

子に宰相にて左兵衛のかみかけておはするなりなへ  
てならぬ人にてなとほめかしければ中納言いと

よき事なりとて箱月とさためて侍りけり

┌ 30  
ウ

おそろしき心ありともしらて又まゝはゝにきこえあはせ  
給へはよき事にこそと申なから下にはいとむねいたき  
事にそおほしける中納言たいにわたり給ひて侍従

にあひ内まいりはとゝまりぬくちをしなから十一月に  
左兵衛のかみにとおもふなりそのよし心えておはすへ  
しとてこはゝ宮の御しよ三条ほり川なる所をし

つらひてそこにすへ奉らむとおもふなりとの給へは  
ひめ君をやなからおほすらんことのはつかしさとたゝ  
あまになりて聞えさらむ所へもゆきなむとの給へは  
しうはことほりなから中納言とのゝかやうにおほし

┌ 31  
オ

たらんをそむき給はむもつみふかし北方こそくち  
おしけれとありけむ程にきゝひらかせ給てむなと

侍従いひなくさめ侍りけるまゝはゝなをこの事をそ

ねみてむくつけ女にさゝめきぎこえあはするやう此

ひめ君をさもあらん下すにもぬすませはやおもふなり  
との給へはむくつけ女打ゑみてうはかあにかすゑ

のかみと申ものゝ候七十あまりなるおきなめうち

たゝれてよにおそろしけなりけりこのほとゝし比の  
女にをくれてさふらふか人をかたらはむと申せとも

聞入るものなくおもひにつらひ侍るに此よしを申さは

┌ 31  
ウ

やときこゆれはいひあはするかひありていとうれしくこそとくくゝの給ふむくつけ女かすゑのかみにしかくといひければはしくみにくけにはもなきうちにてほゝゑみてあなうれしや中納言殿は心えすおほさむといひければそれは北のかたの御はからひてなといへばあなめてたやとくくゝいそかはやといふよくくかためてかへりにけりはくゝにしかくゝと聞ゆれはうちゑみつゝ神無月廿日ころよりもさきにといそきを心よせのしきふ聞てつみふかき事也せさせ給ふへきと申ければあなあさましとうちさはきひめきみに申ければ今までなからへ

32オ

たる事心うさよさきのたひあまにもなりきこえさらむ所へも行たらはかゝる事はきかさらましくとめをきてかゝるうき事をきゝぬる事よとのたまふ侍従かくまての事とこそおもひ侍らす此たひは御ことはりにてこそと申てねをのみなき給ひけりかくてのみおはするにあらず中納言殿に申給へと聞ゆれば北の方になきことを申つけられなんといはむ程もいよくうかるへしかくまておもひたゞれたる事なれば此たひとかく申なすともまさる事のみ有へし又いかなることゝもをたはかり給はむすらんたゞ聞えさらん野山の中に入れてさまをかへ

32ウ

この世をも思ひはなれんとなけき給へはこのたひはことばりにて侍さらはさらは侍従もあまになりてはゝの後世をもとふらはんと袖もしほるはかりにてかくはいひなからわかき人々なれはいつくにていかにすへしともおほえさりければひめきみめのとたにあらはともかくもはからひてまし今はそこをこそなにとも頼たれ此月も過なむとすいかにもはからふへしとの給へは侍従もいかにともおほえすなといひつゝとかくあひするほとにこはゝ宮のめとなる女の宮にをくれまいらせてのちにあまになりて住吉になむ侍けるをおもひ出ておほえ

33オ

させおはしますにやしかくゝと聞ゆればさるもの有とおほえ侍なりいかてつけやるへきとあれは侍従かはゝのもとにありける女のよくしりたるをよひてやりけるふみにさても久しきなとはをろかなるにこそ姫君のおひ出させ給し時はゝ宮もはかなくならせ給ひてのちはいとおとなしくならせたまひて其後又侍従かはゝなりし人にもをくれ侍れともたれくゝもしるへなくてそのかたこそゆかしく侍れあなゆゝしよをそむき給もうらめしくもかきたえ給へるものかなわすれくきのしるしに

33ウ

やさても人つてならて申あはせ給ふへき事侍り  
よろつをすてゝ夜をひるになして参りたまへ  
なへてならぬことになむゆめ／＼とかきてけしけりイ本  
あなかしこ／＼なへてなるらんことには

なむとかきてやりけるすみよしにゆきてしか／＼と  
きこゆあま君いそぎあけてみればあはれる事とも  
かきたるを見てすみそめの袖をしほりけり御返事には

まことに世をそむきて住吉のほとりにすみ

なからもあけくれそのむかしの人の御事のみ

心にかゝりてあかしくらしさふらふ中にも二葉  
におはせしをふりすてまいらせていかにいづ

くしくおひ出させ給ふらんとゆかしくおこなひのさま

たけにもなり給へはわすれ草もなのみし

かた時もわすれ奉ることはなけれともはかなき

世中のくせにてたちぬる心にかゝりておほし

出てかやうにおほせられたることの御うれしさよ

さてもおほせのまゝにいそぎまいりて御身つから

申へく候あなかしこ／＼

とかきたる御返事を見て姫君侍従もすこしはるゝ  
心ちしてかくしつゝ人しれす出ゆかむことを侍従に

おほせあはせ給ひぬ中納言とのゝゆゝしき事を見

┌ 34  
└ ウ

給ひなからおもひすて給はぬをふりいてなはいかにおほ

しなげかむとかたらひなきふし給ふに中納言おはし

たまへはさりけなくてつくろひおはしけり姫君の御

すかたおもやせて物をおほしめしなげくやうなれば三糸

へわたり給はむこともちかくなりたるにうちなげきおも

やせておはしますこそあさましけれとのたまへは

まゝはゝなにおもふらんいかなる人をこひ給ふにやとつふやき

給ふも心え給はず中納言はさま／＼の御なくさみとも

侍従もとへつかはしけるをひめ君御らんしてかほ

とにおほしたる御おやをふりすてゝともかくもなり

なん事のつみふかさよとてうちふしなけきたまふ

事かきりなし中の君三のきみおはしつゝつねに

うつふしかちにてと聞ゆれはいかなるへきにか此ほとは

世中もあちきなくきえもうせまほしく御なごりも

をしくこそなともしさもあらんときはおほしめし

いてなむやとて袖も所せき給へはなにゆへさまて

おほしめすそとのたまへはひめ君たれか忍はんとた

はふれなからあはれにわすれかたくてなみた人めあやしく

こほし給へは中のきみも三のきみも物のあはれを

しり給へる人なればその事となくなみたかちにて露の

┌ 34  
└ オ

┌ 35  
└ オ

┌ 35  
└ ウ

身のはかなきなどのたまひて

消はてむ事そかなしき露の身の同じ草葉の思ひわかれて  
中のきみ

契りてや同じ草葉にやとならむともに消なむ夜半の白露  
三のきみ

年ふとも色かへてみむ春やまに同じふもとの松のみとりを  
あなまかしくしきなにわかさることは有へき侍従の

きみいかにこひしくおもはせむといへは侍従いかならん世まで  
も誰か忍びさふらはむ思ひ侍るに御たはふれなからも  
哀にわすれかたくとおもへることのなみたをと

めて侍従

命あらはめくりやあふと津国のあはれ生田の森にすまはや  
とくちすきみて人めあやしき程にそありける中の君

物のあはれをしり給へはその事となく涙をのこひ給ひ  
けり姫きみ露の身のはかなきはかやうなるほとにいか

なと聞ゆれば中のきみ

契りてそおなし草葉にやとるらんとともにそきえん夜半白露  
といひ給へはひめ君も侍従もいとよなみたまよほされてわか  
れん事をかなしみ給ひけり中のきみなにとなく世の  
はかなきをあはれとおもひつねに心をすまし給ふ

└ 36ウ

人なればとおもひなしてかへり給ぬ心よせのしきふひま

もあれはたちよりのたはかりことちかくこそ侍れいかに

せさせ給ふへきとうちなき申ければかくのたまふ事

のうれしさよいかならん世にわするへきとのたまへは

まことにかくてさふらへとも御かたをこそ頼み奉つれ

ともなみたせきあへすひめきみしうはいまをかきりと

なきふし給ふざるほとに住吉のあま君のほりつゝかく

と申ければくるゝほとにしのひたるくるま奉りけれ

はいひ返してそのほとにみくるしき物ともとりく

たゝめけり心のうちいかはかりかなしかりつる折ふし

中納言おはしければ又さりけなくもてなし給へは

此たひはかりこそ見まいらせむとおほしければ

忍ひかたき色もあらはれてかほにふりかけたるかみ

のひまより御なみたせきあへすこほるゝを中納言見

給ひていかに宮のことをおほすにやめのとの事を

をゆかしとおほし出るにやまたひやうあのかみの

ことを心つきなしとおほすにやともかくも御心にて

こそおはせめなに事もわれにはきこえ給はておやの

おもふほとは子はなきことのほひなきよとのたまへは

姫きみいよ／＼あはれまさりてみえ給ふかしらのかみ

└ 36オ

└ 37オ

└ 37ウ

をすちことにとありともいなふへき身かはとのたまへは  
は、宮のことも又めのとの事もおもひ侍らす殿をも見  
奉らて程ふることもやとかなしくなとこと葉も聞えぬ  
ほとになく、聞えたまへは中納言御めもくれしはしは  
物ものたまはず三条におはすともまろかいのちほとは同  
し事なりはなれ聞ゆへきにあらずなにかはさほ  
とまておほしななくそとてかへりなむとし給ふを  
今一度見たてまつらんとかほふりあけて見やり給へは  
めもくれ心もくる、心ちして侍従もかたはらになみた  
にむせひてあたりけるさてやう、よもふくる程に御車

いてぬれ、くしのはことしやうのことはりをとり御車の  
しりには侍従のりたりさすかに住なれし都をお  
ほしはなる、御心あはれなりころは長月廿日あまり  
のことなるに有明の月哀なるに出てゆき給ひけん  
心のうちいかはかりかなしかりけむあらしはけしき  
そらに鳴わたる雁のこゑもおりしりかほにわれを  
とふかと物かなしきにあま君のやとへおほしつきぬ  
さま、かたり給へはまことにおほしたつも御ことはり  
にこそ今もむかしもまことならぬおやこのゆゑしさま  
まゝはゝなりともいつくをにくみたまふらんあな心うや

38  
オ

38  
ウ

かゝるうきよなれは思ひすくし侍るとてすみそめの袖を  
しほるよりほかの事はなし夜のうちによとにつきに  
けり少将殿はその夜たいにおはして侍従をたつね給ふ  
にをとせすひめ君の御をいふしにやとおほしてひやうへと  
いうわかきねうはうをめして木丁のうちをみせ給へとも  
姫君もおはせすうちさほきて人々につけてたつね  
たてまつれとみえ給はず少将殿に申ければあやしと  
おほしけりさても中の君三のきみのもにもおはす  
るにやといへは心かろくたち出給ふへき人にもあらずいか  
なる事やらん、をの、尋あへり夜も明ぬればつねに

おはせし、かたをたつぬるに御かたはらなりし  
物ともなしとりしたためたるけしきなれば  
みな、なきあへり中納言しか、と聞ゆればあきれさ  
はきてなけきかなしみ給ふ事かきりなし中の君  
三のきみあやしく世を心ほそけにおほしたれとも  
かくまてとおもひよらさりしものをとおの、かなしみ  
あへりまゝはあぎれたるさまにて侍従かさとへたつね  
けり中納言殿の心もかたはらいたさになみたもちさり  
けるをなくよしにしてあたりけり少将とのかくおほし  
めしたちけるほとになさけある御返事は侍りけり

39  
オ

39  
ウ

おほしつゝけてたいのすのこにさめ／＼となきぬ給へり  
三の君こゝかしこを見給ほとにもやのみすにむすひたる  
うすやうありけりなにとなくとりてみればひめ君の  
手にて

無名のみたつたの山のうすもみちりなんのちを誰かしのはむ  
とはかりかき給ひたりけりこれをみ給ひていよ／＼あはれ  
さまざりて中納言殿にみせてまつればなに事にかは  
いみしき事ありともわれにはきこえたまはぬそおや  
のおもふはかり子はおもはぬことの心うさよとて御かほにをし  
あてゝな<sup>(き)</sup>給ふまゝはゝおとこななどのもとにおはすらんさま

└ 40オ

ていたく<sup>(な)</sup>けき給そといへは中納言おほくの子のなかに  
たれかはこの君ほとにおもふへきわか身にもかへまほし  
くなどのたまへはまゝは侍従にくるはかされてよもの  
ふるまひしたまふもしらせ給ひ候はてとつふやくも心  
えずあなむつかしこはなに事そやよにあるへき身ならば  
こそとなけき給ひけるさてあかつきに成ければあま  
君にくし給ひて河しりをすきゆくにおかしうもゆ  
きちかふ舟にのりたるものともあやしきこゑ／＼して  
つまもさためぬぎしの姫松とうたひてこぎ行もなら  
はぬ心ちしてあはれなり京のかたは霧ふたかりて

└ 40ウ

そことも見えすひえの山はかりほの見えたるけしき物  
おもはさらん空たにあはれなるへきをいはむやありかた  
きおやにひきわかれなさけ有しはらからをすてゝ  
いつると行らんと思ひつゝけん心のうちいかはかりなり  
けん是をみてあま君

住吉の海士となりては過しかとかはかり袖をぬらしやはせし  
ひめきみとふにつらさの心ちしていますすこしかなしくて  
船路しも我に物をおもはせし身のうさなれやおつる涙は  
風をいたみ行多もしらぬわたの原漕はなれつるあまをふね哉  
なみたにくれ<sup>(を)</sup>のたまへはしゅう

└ 41オ

故郷<sup>(を)</sup>はなれ行かなしきよ涙にうかふあま小船かな  
なといひつゝ住よしにもつき給ひぬすみの江とていと  
おかしき所にかやにいたひさしすかに所々すみあら  
したりうみのさし入たるに家をつくりかけたればす  
のこのしたによものうをのあそふも見ゆみなみは一むら  
さとほのかに見えてあまのとまやにみるめかりほしあし  
ふきのや心ほそくけふりたちのほるけしきうすゝみ  
にかけるあしたにゝたりひかしにはまかきにつたふ  
あさかほなとかゝりきしには色このはなをうへをき  
はま松かえのしたよりなみたちてきんのしらへにこと

└ 41ウ

ならずにしにはうみはるく見えわたされあはち嶋へ  
ゆきかよふ波間にうかふ海士小舟もはかなくあやうき  
心ちしてみゆるわざとならてはたまさかに立よる人も  
なししつかに衰れるすまぬなりちふつたうあさ

やかにつくりてあみたの三尊あんちしてまつりあま  
君にしにむかひてなむ西方極楽教主阿弥陀如来

むかへ給へと申もあらぬよにむまれたる心ちしてひめ  
君侍従もとくあまになりておなしさまにおこな

はむとのたまへはあま君はかくておはしますともた  
同じ御事(山部)□□ころにてこそと申せはたゞ世を思ひ

すては□(心)みやの後の世をとふらひ奉らんとしたまふゆめ

くおもひよらぬ御事なり今はこのあまか申さむまゝに  
おはしますすはうちすて奉りていつちへもゆきなむと

申給ふほとに御心にもあらずあかしくらし給ふほとにあま  
きみおこなひのひまにたゞこの君の事をおもひつゝなく

よりほかの事はなしせうしやうはそのうちかみほとけにも  
しるしあるところのみまうてつゝこのきみのありところ

しらせ給へといのり給ふすてに冬にもなりぬ雪いみ  
しう降けるにくらまへまうてしてけかうし給ふ

にみそらいけのあしのはさまにをしとりのひとりね

111

42オ

たるをみて

我ごとく物やかなしき池水につかはぬをしのひとりのみして

となかめ給へともぎゝしる人もなしやまゝてらゝしるし  
あるところにまいりてたゞこのきみの事を申給へとも

あけくれ心もそらにてみやつかへも物うくてすこし給ふ  
てうきみわかき人さのみ物まふてのみするはいとあしき

事なりなにかをかくまで思ふらんとおほせけりひとへにかの  
きみのありところしらせ給へといのり申されけり中の君三

の君もひめ君侍従などの事つねにおもひいて哀いか  
なる所にす□(みて)□の事をおほし出らむと忘るゝ

ひまな□(心)思□(心)ふをまゝはゝなにことにまかゝしく

あけくれなき給ふはわかいかにも成なむ後はよもかくは  
おほさしとはらたち給へはおやなからもなざけなくそお

ほしけるさて住吉にはやうく冬もれるまゝにいと  
さひしさまさりて(ついで)あ(有)ら(有)き(有)風(有)ふけはわか身のうへになみ

たちかゝる心しけるおきよりこぎくる船にはあやしき  
こゑにてにくさひかけるなとうたふもさすかにおかし

かりけりすみの江には(屋敷)霜(屋敷)かれ芦の水こほりにむすほ  
はれたる中に水鳥の人にもおとろかすつりととのゝ

したにうはけの霜うちほらふにつけてもおもひの

43オ

42ウ

43ウ

こすことなし

水鳥のうはけの霜を打はらひをのか羽風やさひけなるらん  
とうちなかめ給ふにかたはらなるしゅうもめうちさめてあはれ  
少将殿の御手におはしてなけきあかし給ひしになを

此頃はいかにおほしなけくらんとなかめわひつゝひめきみ  
さひしき御なくさみにことをそひかせおはしますさて少将は  
おもひにしつみ三のきみにもとをさかり給ひけりすみよしには  
つれ／＼なるまゝにみきはにしのひてみ給へはうつせかひみるにみる  
めなどみきはにうちよせられたるをおかしくみゆこれをむつ  
ましき人(つ)に(あ)せきこえはやとなかめつゝ姫君かくなん

世中(にじ)□□身ひとつをありわひてしらぬ浜路に年をへにけり

44オ

打なかめたまひてあらぬよにむまれたる心ちして中納言殿より  
はしめてかたえの人々いかにおほしなけくらん(是等イ無)さてもおやに  
物を思はせ奉るはつみふかき事なり命ありとはかり  
しらせ奉らんとてあま君のもとにありけるわらはを京へ  
のほせいづくよりとはいはてしか／＼の所へまいりてうち  
をきてやかてかくれよとよく／＼をしへのほせけりさてか  
の御しよへまいりつゝちうものつまに立よりて文まいら  
せんと申せはいづくよりとてはした物出てとひ  
けるにたゝまいらせ給へ中納言殿は御心へあるへきと申

44ウ

けれは文うけとりうちへいりぬやかて御つかひはかへりぬ  
いかなる文やらんとみ給へはひめ君御手にてありけり御めも  
くれてたえかたし御らんすれば

あなゆゝしよの中のたえかたさにゆくゑもしらすなりし  
をいかにおほしなけくらんあさましなからたひたちつる  
心のうちおほしめしやらせ給へなくさむかたとはそな  
たの風をのみむつましはてあかしくらすになむ  
たれも／＼おはしますすにや哀れむかしをいまに  
なす世なりせばなといかにおほしなけかせ給ふらん  
こと(に)□□(みか)くこそおしからぬ命なからへてとはかり

聞え(き)□□るになむ心をつくすかなしきよとかきすきひ  
ておくにかくなむ

45オ

あさかほの 花のうへなる 露よりも  
はかなき物は かけろふの あるかなきかの  
こゝちして 世を秋かせの うちなひき  
むれゐるたつの わかれつゝ たゝひとりのみ  
ありそうみの かひなきうらに(被イ) しほたるゝ  
あまの衣もて わかこつく ほしやわつろふ  
日をへつゝ 歎きますたの ねぬなほの  
くる人もなき あしひきの 山した水の

45ウ



あさましく なかれ出し ふるさとに

かへらんことも おもほえず いかにか契りし

いにしへの むくぬなればや たちおの(つと)

中をはなれて つるの子の 雲ははるかに

たちわかれ 行急もしらぬ しらなみの

よるのころをも かへしつゝ ぬるよの夢の

夢ならて こひしき人を みちのくの

あふくま河を わたるへき 身にしならねは

さゝかにの くもてに物を おもふかな

とりの(こまた)に おともせぬ とをちの山の

こ(けふ)か(ま)に くちはてぬとも としをへて

人にしられぬ むもれ木と なりはてぬへき

我身なりけり

浜千鳥跡はかりたにしらせねはなをたつねみむしほのひるまを

となむ有けるを中納言み給ふにつゝむなみたのせきあへす

こ糸もをしますなき給ふことかきりなしこのつかひを

うしなひつらん事の口をしさよとて文をかほに

をしあてゝふし給ふいかなるたひの空にたゝよふらんと

かなしさまさりてあはれなりやかて御さまかへなんと

し給ふにしたかへる人々今一たひもとの御すかたにて

46ウ

姫君にあひ奉らん事こそほむきにて候へといろく申

とゝめ侍けりさて少将これをきゝ給ひて三の君にとひ

給へは何心なくかたり給袖もところせくほとなり大かた

にあはれをしり給ふにやとうちなきてあかしくらす

ほとにとしもあらたまりぬ正月のつかさめしに

右大臣は関白に成給ふ少将は中将になりて三位し給ふ

をうれしとも思はてひとへに神仏にいのりひめ君の

行急しらせ給へといのりけりはかなくもはや夏もすぎぬ

九月に初瀬にまいりて一七日こもりねんし侍りけり七日

といふ夜あ(かた)つき(かた)にすこしまとろみ侍りしに

御夢にやんこ(かた)なき女房の打そはみる給へるをあなう

つくしやと見れば姫君なりむねうちさはきうれしさ

かきりなくてさてもいつくにおはしますにかかくいみしき

めをほみせ給ふそいかはかりかおもひなかくとしり給へる

といへはうちなきてかくまてとはおもはざりしをいと

あはれにそといひてたち給ふ御袖をひかへておはしと

ころしらせ給へとあれは

わたつうみのそこともしらて佗ぬればすみよしとこそあまはいふなれ

といひてたつを御返事せん心ちしてうちおとろきけり

いよく夢としりなはとかなしく仏の御しるしにこそとて

47ウ

46オ

47オ

夜のうちにけかうして住よしといふ所をたつねまいらせむ  
とて御ともの人々におほせられけるは御精進のつめてに天  
王寺住吉へまいらんとおもふなりをのくはこれよりかへり  
て此よしを申せとおほせありければいかに御ともの人  
なくてはとてまいらむと申す今夜のしけむにまかせたれ  
はそのまゝになむことさらにおもふやうありいはむまゝにて  
あるへしとてをのくをかへすなりとおほせありければ  
ちからなくてみなくかへりぬたゝ隨身一人くし給ひて  
しやうゑのなへらかなるにうす色の衣に白きひとへ  
きてわ□□はきて龍田山をはいてたまふさて住

48オ

の江□□はそのあかつきひめ君の夢に少将殿のよに心  
ほそけにて山中にたゝひとり草枕してなきふし  
給ふ所へゆきたりつるに我をみつけて袖をひかへてかくなむ  
尋ねかねふかき山ちにまよふかなきみかすみかをそことしらせよ  
となむ有つるとあはれにかたり給へはしうけにいしかはかり  
なけき給ふらんまことの御夢にこそとてしのひねをなき  
給ひけり中将はならぬたひなれはしろくいつくしき  
御あしにわらくつあたりてちあへて行やらぬけしき  
なれはみちゆく人もめをとめまいらせけりはるくくと  
なみたにくれゆきまつのしたにて

48ウ

晩の夢をたのみてたつぬれと住よしとたにいふ人もなし  
となかめおはしければとし十四五はかりなるわらは松  
の落葉をひろひけるをめてをのはいづくの物やらん  
此わたりをはなにといふそとおほせあれは住よしとなむ  
申ところなりと申せはいといとうれしくて此あたり  
さるへき人やすみ給ふとたつねたまへはわらはかんぬし  
とのゝ事やと申せはさてもみやこ人などすむかとゝ給  
へはすみの江と申所にあまうへとて京の人おはし  
ませは申ければそれをしるへにてたつねおはしければ  
江につく□□たる家のさひしきやとのけしき

49オ

月は木□□のたえまよりほのかにさし入ていと物  
あはれなり日もくれければ松のもとにて人ならばとひて  
ましなとおほしておはしけるに  
白浪の行ゑもしらぬ君ゆへにたつねてそよる住吉の松  
なかめ給ひてたゝすみければさらぬたにたひの空はかな  
しきに夕なみちとり哀れになきわたりきしの松風  
身にしみて  
我思ふ人もなきさにたつねきて満くるしほに身をやなけまし  
と心ほそく立わつらふことのほかに聞えけり此こゑりつ  
にしらへてはむしきてうにひき給ひしかとおもふに

49ウ

むねうちさはきこ聞給ひけん心いへはをろかなり

あなゆゝし人のしわざにはよもなとおもひながらその

音にさそはれてなにとなくたちよりて聞たまへは

つりとのおしおもてにわかきこゑしてことかきならす

人あり都にてかゝる所もみさりし物をみねの松風きんを

しらふる心ちして心有らん人にみせはやなとうちかたらひ

てさあらぬたに秋の夕はつねよりもものうきに旅の

空はあはれなるなど打なかむるこゑ侍従に聞ながら

むね打さはく心をしゝつめてなをくちかくよりきゝ給ふ

にひめ君（の御）□□にてあはれなる松風かなとて

たつ（女）□へ□人もなききの住の江にたれ松風のたえず吹らん

とうちなかむるをきけは姫君なりあなゆゝし仏の御

しるしはあらたなりとおもひ給ひてすのこにわたりより

てうちたゝけはいかなる人にやとてしゝうかきよりのそけは

すのこによりかゝりたるすかた夜めにもしるしの見え

ければあなあさましや少将とのゝおはしますいかゝ申へ

きといえはひめ君も哀にもおほしたるにこそさりながら

人聞みくるしかりなむわれくはなしとこたえよと

おほせあれはしゝうさし出こはいかにあやしき所まで

たつね侍る事よさても其後は姫君をうしなひ奉りて

50ウ

50オ

なくさめかたさにかくまてまよひありき侍になんいよ

くそのいにしへの御こひしなといひすきひて

あはれなるまゝになみたのかきくれて物もおほえぬ

に中将殿もいとゝもよほす心ちそし給しゝうの君

の事をは忍ひおもひまいらせつるにうらめしくも

のたまふ物かな御こゑまで聞たてまつりたりよし

此世にあらぬ身にこそとて御袖をかほにをし

あて給ひてうれしさもつらさもいまはなかはにこそ

とて御なみたせきあへすのたまへはしゝうことほりに

おほえて□□（にても）御あしやすめ給へみやこの御事も

ゆかしく侍□とてあま君に申あはすれば有かたき

事にこそたれもく物あはれをしり給へかしまつ

これへいらせ給へとてしゝうをすゝめければしゝうなれ

くしく侍れとそのむかしの御ゆかりなる声たひの

御ならひくるしからすとていれまいらせけりかみひやうふに

やまとゑかきたる一よろひたてゝもやのみすみに月かけのきすにくちき

ちやうあしつかはしちやうあしつかはしつらひていとあるへかしくしつらひたりイ本

いとうつくしき御あしにつちつき所々ちあへてかほ

うちあかめてよにくるしけにおはするをあま君いそぎ

出て聞ゆるやう姫君もこれにおはすなり侍従あはれとはみ

51ウ

51オ

奉りながらわかき者にてうちうはのまにはなち申て候このあま

はうれしきもつらきもならひてすきたる身にて侍れ

はかたしけなくあはれにとそ見奉れあなゆし

いかてかをろかにはとているまゝにひめ君に此よしを聞

ゆればわれもをろかならすおもひ奉れともこゝろあはせたり

と都までも聞えのつゝまじさにこそとのたまへは御こと

はりなからよろつことのさまにこそ侍れあはれもし

らぬ岩木なりとも事にはゆるく事にて候この

あまを大事におほしめさはなに事も申さむまゝに

おはしなはうみ河にもきえうせなんとくとき

給ひ侍にたゞひめ君のおはします所へくし

参らせよとのたまへはしゅうけにもとおほえて夜ふくる

まゝに中將との御袖をひきておしいれ奉りぬさてもうち

ふすこともおはしまさてあさきよりふかきまての事のため

姫君は心やましくおほしてうちそむきてみ給ひけれとも

さすかにあはれにてよもすから涙うちそへかたらひあかし給ふ

さか野にてみしよりもかきりなくねひまさり御にほひも

なつかしくおほしけるかゝる程に関白殿北のまんとこ

中將のたゞひとりすみよしにまいり給ふに御とも申さて帰

りたるものみな心えかたしとて御むかひにいそきまいるへきよし

52ウ

おほせらるれば御ゆかりの人々さへもむのみくら人の少將

兵衛のすけ四条の少將そのかす九百人よすみよしへ

尋ねまいられければ住の江にてあひたてまつりけり

中將しけんにかかすこれまてまいり侍しにおもひの外に

此あたりの人にちかつきてとのたまへは神仏へまいりて

おこなひをこそ申侍るにゆゝしき御つとめかなとたは

ふれてうちわらひ給てけり御つゐてになにはあたりを

御覽すへきとの給つゝ夜ふくるほとに住の江つりとのにに

塩みちて月さやかにすみわたりて松風波のおとに

たくひおしなかりければ三位の中將こと藏人の

少將笛尺箱付けしやうのふえさへもんのかみ歌う

たひ給けり月しほのおたママにかよはぬにひきかへひ

きかへおもしろく侍りければ姫君しゅうなとこれを

聞てすこしはるゝ心ちしたまひけるさてあげぬれ

はあまともをめしてかつきさせて御らんしけりつき

の日は都へのほり給ふひめきみをはる中人のむす

めとてあひくし奉り給ふあまきみにてつとくにゝよきたし

やうたまはりぬあま君はわか身の事よりもめやすくみたて

まつるに此程の名残申はかりなしあのひめ君の御事

のみそおもひ侍りよみちもやすく侍りなむとてをくりて

53ウ

うれしき物からはなれ行もさすかにあはれなりにも  
かくにもおつる涙かな仏になりなむのちそやとままるへ  
きとてくときけるひめ君しうもなにとなく二とせまて  
住なれし名残をもしくあはれにて

人ならはいかにいほまじ住よしの岸の姫松なれし名残を  
とよみ給ふ又しう

住吉の松の木す多のいかならんとをさかるにもぬる、袖かなイまて袖の露けき

さてうみのおもてもすきければみやこもちかくすみの江は  
とをさかりひめ姫いかなる契りにてとし月をうくりけん  
おもひつけて

はかくもわなれし住の江の松の梢やとをさかるらん  
このたまへはあまきみ

心からうきたる船にのりそめて日とひも浪にぬれぬ間そなき  
よとまておくりたてまつり住の江にかへりぬはまきみ心  
もとなく侍りつるにたひらかにけかふし給ふとてなのめ  
ならすよろこひ給ふ事かきりなし北のたいをしつらひて  
すませ給ひけるまはこれを見て中将とのはいかなる  
人のむすめとすみ給ふなるとむくつけ女とかたりそね  
み給ふほどに中納言月日のかさなるまにおもひのみまさ  
りて今一たひものすかたにてあひみむとおもふ

54ウ

54オ

心のつれなさよかくてのみあかしくらすになとおほす  
程にとしのほとよりの外におひをとろへて見え給ふ  
まは中納言にきこゆるやうひめ君はたちぬる月  
かやあやしき法師にくしてこそおはしけれ心うき  
事にこそたしかに人のつけ侍しと聞ゆれば中納言  
いかやうにもたいらかにおはしまさむこそうれしけれ  
たれ人のいひけるにやと尋ね今ひとたひあひみんし  
ての山をも心やすくこえなましとうれしきの給ひたちと  
きこゆれはいとつれなけにてたれにてありしやらんと  
そこはかないなしてわすれけりとのたまへはちう

なこむ心つきなしとおほしてなむあみた仏とその給ひ  
けるさて姫君はかくてありとも中納言殿にしうまいら  
せはやとおほしけれともまはの心おそろしき人なれば  
心あはせたりとて神仏にもいのりろひ給はむにはたかため  
にもいとおそろしき事なり住よしにおはすとお  
ほしなせつめにまいらせ給ふへしとのたまふに姫  
君おほしなけくらむことかなしくてよにすむかひ  
なくてとの給へはまことにことほりなからもたし申さむまゝにて  
おほしませとて二条京極なる所にわたり給ひけるこゝろ  
ならずあかしくらし給ふほどにひめ姫過君かにしとの

55ウ

55オ

十月よりたゞならずなせ給ふて又のとしの七月にいと  
うつくしきわか君いてき給ひけり中将おもひのまゝにおほ  
しかしつき給事かきりなしかうしつゝ過行ほと

に中将は中納言になりたまひてやかて右大将に成給ひ  
けり中納言は大納言になりてあせちかけ給へりとも  
うちへ参りあひてむつ物語のつゐてにことのほかに御とし  
よらせ給ふ物かなとの給へは大納言なみたにくれおもひ  
ことの外ふかきはこれにて御覽候へかくてもいのちのつれ  
なさとてなけき給ひけり大納言殿につゐてにしらせたて  
まつらはや<sup>(おほし)</sup>□<sup>(おほし)</sup>□<sup>(おほし)</sup>□<sup>(おほし)</sup>□<sup>(おほし)</sup>□<sup>(おほし)</sup>ともなをおほしかくしてそゝろに

袖をそ<sup>(じ)</sup>□<sup>(せ)</sup>ほり<sup>(せ)</sup>るさてかへり給ひて大将ひめきみに大納言  
にうちにてまいりあひぬるとかたり給へはおやの思ふほとに  
子はおもはぬ物とつねにおほせられし御ことのはかなかやうに  
おほくのとし月をすくしなからかくとも聞え奉らて  
おほしなげかせ給ひつるいかはかり神仏もにくしと  
おほすらんあはれ女の身はかりうらめしき物そとてよに  
つらけにのたまへは大将まことにこはりなりをさな  
き物も出きたれはわれもいかはかりかほみせ奉らまほし  
けれとも此をさなき人までもおそろしさにこそ  
さりなからしらせ侍るへきこともちかく成たりしはし

┌ 56  
ウ

┌ 56  
オ

またせ給へなとこしらへ給けりかくしつゝ過行ほと  
によにたくひなき姫君又一人いてき給ひけり思ひ  
のまゝにおほしかしつき給ふ事かきりなしかやう  
になきみわらひみあかしくらすほとにつなかぬ月日  
なればわか君七姫君五に成給ひけり八月にはかまきさせ  
まいらせてとおほせられけりそのつゐてに大納言とのに  
はしらせ奉らんとおほせられければ心もとなくまぢ給へり  
かゝるほどに大納言とのに内にてまいりあひてむつ  
物かたりのつゐてに八月十六日におさなき物はかまき仕  
らんと<sup>(お)</sup>□<sup>(お)</sup>も<sup>(お)</sup>□<sup>(お)</sup>るなりことにゆはめて申さむときこゆれば

大納言よろこひうけたまはり候へともさりなからさやうの御よろ  
こひの事はいとまかしくしき身にて侍らんとしたまへはことに  
おもひはからひ侍るとのたまふかならずとのたまへはさあらはとも  
かくもおほせのまゝにこそとてその日にも成ぬればむつまし  
きかんたちめ殿上人なと参りあへり大納言もすこし  
ひくるゝほどに参り給へりよろつにありつかはしてくら  
人つかさの物などそのほかかすをしらす参りあひていと  
ことくしき事かきりなしさてそのときにも成ぬれば  
大将大納言のなをしの袖ひかへてうちへ引入給ひぬ  
もやのみすのまへにしとねしきてさてわか君ひめきみ

┌ 57  
ウ

┌ 57  
オ

いたしてすへたてまつりけり御はかまのこしゆひ給ふ  
とてよくくうちみつゝ御袖をかほにをしあてゝふし  
給へりやゝ久しく有てのたまふやうよろこひの御さし  
きへまかゝしきとはこれをそ申となれひめ君の御すかた  
みたてまつるにわかうしなひおもひなけくむすめのおさ  
なかりしにたかはすおはするほとにそのむかしおもひ  
出られて忍かたなく侍つるゆるさせ給へとて涙せきあへ  
すむせひ給へりひめ君侍従ちかくよりて木丁のほこ  
ろひよりのそき給ふにわかくさかりにおはせし御す  
かたのあ(ち)ぬ(ま)ま(き)お(い)お(と)ろへて御くしも雪をいたゞき

┌ 58 オ

御ひた(ひ)にはしかいのなみをたゞみ御まなこには涙に  
あらはれてひかりすくなく見え給へはあなかなしとて  
ふしまろひ給ひぬ涙の色うちきのためとにくれなぬ  
をそむる心ちして侍りけりみる人間人心あるも心  
なきも袖をしほるはかりなりさて御よろこひもすきぬれは  
人々に御引出物さるへきやうにし給ひける其内に大納言  
とのにはこうちきのなへやかなるを奉り給ひけりあやし  
なから御かたにかけてかへり給ひぬまゝはゝにむかひて大將  
とのゝわれをむつまじき物におほしなし給へりうつく  
しかりつるわか君ひめ君を我まことおもはゞいかはかり

┌ 58 ウ

うれしからましぬ中人のむすめなれともくわほうさい  
はいある人かなとのたまひて姫君わかうしなひつる姫君  
に似給へる物かなあはれつねに見奉らばやとのたまへはまゝ  
はゝ三のきみのもとへをはせし人なればそのゆかりとて  
むつひ給ふこそ哀れその公達を三の君のもとにまう  
け給たりせはこゝかしこのためもめやすかりなん物を  
あたら人のやとのたまへはむくつけ女関白殿もけすはら  
とてもちぬたまはぬにてうつたまはりて候へと申  
けるさて大納言殿のうちきあやしとおもひてとりいた  
して(け)かへし

┌ 59 オ

見給へはわかたいのひめ君のかたにきせはしめし時の  
うちきなりおひのひかめやらんとてよくく見たまへはたゞ  
それにそ有けるむねうちさはきもあやしとおもひてたゞ  
さうしき三人はかりめしくして大將殿へおは  
して(内)してん(内)のすのこにめたま(内)を大將いそき出  
てあやしく侍る御いてかなこれへとおほせられけれ大納言  
うちへいり給ひておほせらるゝやうよにおこかましく候へ  
ともよろつになつかしくおはしませは参りつるなり  
ゆるさせ給へきのふ給はりたりしこうちき我うし  
なひて思ひなけくむすめにおさなくてきせせめし

┌ 59 ウ

ときのうちきにて侍るもし老のひかめにや侍らん心にかゝり候まゝ人のめしらすはせ参るなりとおほせられけるに大將のとかくおほせられぬさきに姫君侍従もやのむすの内よりいそぎ出てなみたにくれて物をたにいひ給はねは大納言みたまひて心も消かへりこはいかにとてあきれ給ひぬやゝ久しくありて大納言侍従にむかひてのたまふやうひめ君こそあやしのをやとてとてもかくてもおほして音つれし給はぬにいかはかりかは思ひきえしに今まではかなき命なからへてありぬればこそあひ奉れおもひ消(心)は後のよまでも思ひにてよみちのさはりとも

└ 60 オ

なりなましかわかなれるありさま岩木ならすは見給へかしあなゆゝしの人の心やたゝ命のみこそうれしけれあかしくらしつもりし月日はいかはかりとそおほしめすあはれ人のおもひはおふなる物をとの給へは大將ひめ君侍従をのゝはしめよりおはりまでの事ともかきくつくしときつゝかたり給ひてをろかならぬよしきこえければその時の有さまむかしもくまゝるためしありかたくそおほえけるさても日くれければ大納言もかへり給ひぬまゝはゝにのたまうやういてやたいの君にたつねあひ侍かなまこといやしき法師にくしてひかし山におはしけり

└ 60 ウ

たゝうきよにはなからへぬへき物こそこのたまへはまゝはゝあなうれしやないかゝしてをはしつるにやこまかにきこえ給へおほつかなきにとのたまへはいかなる人のうらめしきことはたはかりけるやおもひわつらひて住吉までまよひゆきたりけるを大將との物しゆきやういまいりのつゐてにもとめあひてとし比くしておはしけれとも世中のむつまじきにはゝかりて候へともこのたまはさりけるそいつくしきわかきみひめきみよそにみしもまろかまこにて侍りあやしき法師にくしてとありしに大しやうのまたなき物とおほしてかつき給ふそ。さてもくとして

└ 61 オ

くちあきてめしはたゝきてかほうちあかくしていひやるかたもなくそゝろきぬたり中の君たいらかにおはしませける事のうれしさあはれとてよろこひ見奉らばやとおもひけりおやなからもうとましくそおほされける大納言よろつくときたてかゝるうきよには御みはかりとてかへすゝもほいなく心うければひめ君のはゝ宮の御所の三条堀川へそふたゝひわたり給ひけり大將此よし聞給ひてゆめゝさる事おほしめすましくとてもの御所にかへり給へといろゝのたまへとも大納言殿申されけるはあさましくまどひありきけん物をとりをき

└ 61 ウ



# 甲南女子大学蔵住吉物語解説

桑 原 博 史

住吉物語の諸異本は

## A 略本系

第一類 国立国会図書館蔵吉野弘隆旧蔵本ほか二二本

第二類 住吉神社蔵袋綴写本ほか三本

第三類 東京教育大國語国文学研究室蔵奈良絵本ほか三本

## B 広本系

第四類 無窮会図書館蔵写本ほか一七本

第五類 大阪府立図書館蔵写本ほか一三本

第六類 北村季吟本ほか三本

のように、二系統六類にわけて考えられるが、甲南女子大学蔵住吉物語はそのうちの第五類に属する写本である。

同本（以下、甲南本という）は、故山脇毅博士旧蔵の袋綴一冊本。江戸期の写。水色の紙の表紙の左肩に朱地の題簽があり、「住吉物語」と墨書されている。遊紙には「甲南女子学園」「甲南女子学園図書館38・9・23（購入）」の朱印がある。本文は一面一〇行書写、墨付六二枚。奥書なし。

冒頭と末尾とを、同類の宮内庁書陵部蔵写本（以下、書陵部本という）と比較してかかけると、次のとおりである。

### 〔書〕

むかし中納言にて左衛門督かけたる人おはしけり御せんふたりをかけてかよひつゝすみ給ける一人はときめく諸大夫のむすめなりそのはらに姫君二人おはしける

### 〔甲〕

むかし中納言にて左衛門督かけたる人おはしけり御せんふたりをかけてかよひつゝすみ給ける一人は時めく諸大夫のむすめなりそのはらに姫君二人おはしける

### 〔書〕

むかしもいまもはせのくわんおむはしるしあらたにおはしますすゑはるくときかへ心あらん人はよくくみたまへわろき人はめのまへにきえうするなり心あらん人はみてもしのひたまへとてかきつけ侍なり

### 〔甲〕

むかしも今もはせのくわんおんはしるしあらたにおはしますすゑはるくときかへ心あらん人はよくくみたまへわろき人はめのまへにきえうする也心あらむ人はみてもしのひ給へとてかきつけ侍なり

漢字かなのあて方以外はまったく一致しており、同類の中でも密接な関係にあることが知られるが、なお細部にわたって比較すると、書陵部本よりは同系の明日香井本に近いことがわかる。

給ひてみせ給ふ事このよならずうれしく侍れともこの事はかりゆるし給へとの。まふひめ君もとよめまいらせ候へともきかせ給はすわたり給ひければ三条へさまよの物とも

奉り給ひて人々も参りあへりさてもひとりおはす

へきにあらすいたはしきとて大将のをはにたいの御

かたと申人にそすませ給ひけるそのむかしたいに住ける

人々はさながら大将のもとに参りてよろつ過にし

かたの事ともかたり出てなきみわらひみあかしくらし

ける其中にも心よせのしきふまたなき物にそおほしける関白殿

よりはしめてよろついかなる人のイの人々の人のむすめとしり給ける

┌ 62オ

程にはやあせちの大納言との宮はらの姫君にておはし

けるわざとありかたき事とそ人々もいひあひける此ことを

聞て兵衛のすけも中の君のもとへかれくになりぬさる程に

中の君三の君もおやなからあさましき事をし給ふに人の

遠さかるもことほりなりとてねをのみそなき給ひけるひめきみ

此よしを聞給ひてむつまじかりし人なれはとてむかへ奉り

て過にし事ともかたらひなくさめはやとのたまへは大将もよき

事にこそとてむかへてもてなし給へりかくとし月ふりゆく

まゝに大将殿にちの関白ゆつり給へりいよめてたくはん

しやうかきりなしわか君は元服せさせ給て三位中将とそ申

┌ 62ウ

けり姫君は十八にて女御に参り給ひける侍従は内侍とそ申けるよのなかの人しのはぬはなかりけり住吉のひめ君をは北のまんところとそ申けるわかひめ君よりはしめてつたへきく

人こゝろあるも心なきもうとみはてられてやふれたるい糸のよも

きのそのとあれたるにむくつけ女とあかしくらし給ひけるも

さすかにははれなり人にものおもはせしたるむくるなれば

なくよりほかのことはなしかくて年月ふるまゝにおとろへて

はかなくなるをむくつけ女とかくあつかいけるほとにをのれも

たくひとりなりにけりこれをきくに姫君にしゅう申てと

ふらひける中のきあ三の君いとなみとふらはせたまひけり

┌ 63オ

よの人はありかたき事かなとそ申けるむかしも今も

はせのくわんおんはしるしあらたにおはしますすへはるく

とさかへ心あらん人はよくみ給へわろき人はめのまへ

にきえうする也心あらむ人はみてもしのひ給へとてかき

つけ侍なり

┌ 63ウ

書陵部本は、「千種大納言有敬卿真跡本」とつたえられる一本に源流があるらしく考えられるので、わたくしは、第五類の他本系と区別して千種本系という名称であつかっている。同系の現存本には

A 1 宮内庁書陵部蔵写本

2 国立国会図書館分館静嘉堂文庫蔵写本

3 山岸徳平博士蔵写本

B 1 高山市立郷土館蔵明日香井本

2 橋本進吉博士旧蔵写本

C 1 甲南女子大学蔵写本

があるが、甲南本の本文はBの明日香井本に近く、しかもABCと展開して行くにつれ十行古活字本（第四類）に近似して行く傾向がある。

AとBのもっとも大きなちがいは、Bの方に歌が一首多いことである。それは、長歌「あさがほの花の上なる」に連続させ反歌のようにして「はまちどり」の歌を有しているためである。「はまちどり」の歌は、A Bともに少将の恋歌として物語の発端近くに有しているもので、Bの明日香井本は、それを重複してふくんでいることになる。わたくしは、歌詞から考えて当然少将の恋歌としてあるべき「はまちどり」の歌を、姫君の詠歌として重複させている明日香井本は、単純な誤写によってそうなったものと考えていたが、Cに加わるべき甲南本を見るにいたって、これはかならずしも単純にそう処理できる問題ではないことを知った。かりに明日香井本の重

複は偶然であっても、この重複以外にも重複歌があったり独自の本文があったりしている甲南本は、住吉物語の諸本展開の上で、今後考究されるべきいくつかの重要な問題を内含しているのである。

今、倉卒のうちに調査して知り得たそれらの問題点のうち、「イ」本の性格認定の面を中心に解説したいとおもう。

鑿刻によって知られるように、甲南本には「イ」の記号をもって他本との校合が加えられている。それらは

〔イ〕 かみな月十日

〔イ〕 かみなイ  
正月の十日

〔イ〕 はつしくれいまふりそむるもみちは色のふかさをおもひしれ  
きみ

〔イ〕 初時いまい雨いまいけふいまいふりそむる紅葉いまいの色のふかきをおもひしれとそ  
のような小異同の校合についても

〔イ〕 しゅうこの御返事はかりはと申けれとよのつゝましさとなけき  
給ふひかすふるまゝにいかゝせましのみおもひくらしたまふ  
ほとに御めのとれいならすわつらひ給へは

〔イ〕 しゅう御返事はかりはと申けれとよのつゝましさとなけき給ふ  
イ無  
さるまゝに少将おもひかねて神仏にもいのり給ける三の君のも  
とへもゆかまほしけれともおもひあまりては侍従にあひてこそ  
心をなくさむれにのたいのけ色をたゝみすなりなんこと的心

うくてつねはよかひければよひあかつきにたいをすぎ給とてふるき哥のいと哀なるをおかしきこゑにてうたひつゝ袖のしほるはかりにてすぎありき給けるかくしつゝあかしくらすほとにひめ君のめのとれいならす心おほえければ

【書】御返事もなしさて侍従うちなきてあかつきのかねのをとこそき

こゆなれと申せは

【甲】御返事もなしイ無こそは侍けめあなあはれなといひかよはす程に

さまよなかはに過てかねのおとき是迄イ無えければ侍従打なきてあかつきのかねのをとこそ聞ゆなれと申せは

のようなかなり長文の異同の校合についても、多く書陵部本と一致している。わずかに

【書】ときをかへすとくゝ参り給へと有ければ

【甲】よろつをすてゝ夜をひるになして参りたまへあなかしこゝなへてならぬことになむゆめゝとかきてけし奉るイ本へてなるらんことにはなむとかきてやりける

ほか二、三の不一致があるだけで、校合された本文にかぎっては、「イ」本は書陵部本に近いといえるであらう。

しかし問題は、「イ」本の校合なくしてしかも書陵部本と甲南本とがはなはだしくことなっている二箇所にある。

【書】としふとも色かへてみむはるやまにおなしふもとのまつのみ

とりを

かやうになかめつゝ姫きみしゅうはわかれむ事かなしみ給へり

【甲】年ふとも色かへてみむ春やまに同しふもとの松のみとりを

あなまかゝしきなにゝわかさることは有へき侍従のきみいかこひしくおもはせむといへは侍従いかならん世までも誰か忍ひさふらはむ思ひ侍るにた御はふれなからも哀にわすれかたくとておもへることのなみたをとゝめて侍従

命あらはめくりやあふと津国のあはれ生田の森にすまはやとくちすさみて人めあやしき程にそありける中の君物のあはれをしり給へはその事となく涙をのこひ給ひけり姫きみ露の身のかなきはかやうなるほどにかゝたと聞ゆれば中のきみ

契りてそおなし草葉にやとらんともにそきえん夜半白露といひ給へはひめ君も侍従もいとゝなみたもよほされてわかれん事をかなしみ給ひけり

【書】ナン

【甲】浜千鳥跡はかりたにしらせねはなをたつねみむしほのひるまを

他にも小さな異同で、甲南本が書陵部本と一致せず、当然「イ」本の校合のあつてよいところにそれが見出せない箇所があり、ここにいう校合が、現在われわれの考えるほど学問的なものでないことは、のちにも触れるとおりでである。したがってこの二箇所とも、元

来「イ」本にはなかったのにその校合を見おとしたものとも考えられはする。しかしながら二、三字の異同ならばともかく、歌一首以上の分量のあるものを、はたして見落すであろうか。地の文の異同の校合はすくなく、歌の歌詞の異文校合にはくわしい傾向から推しても、見落しの可能性はわずかしかないとおもうのである。

むしろこの二箇所とも——前者は「契りてぞ」の重複歌をふくむ重複場面であり、後者も重複歌であることは既述した——「イ」本に存したと考えた方が、その「イ」本がBとCとの中間に位置することになり、書陵部本から「イ」本まで、一つのくずれ行く本文過程として把握することができ、好都合ではある。

すなわち住吉物語の諸本を概観すると、姫君たちがそれとなく別れを惜しむ場面と、「あさがほの」の長歌の直後に位置する歌の有無とは、ともに大きな異同の存する箇所となつてゐる。ところが今までは、なぜそういう異同がおこり得るか、具体的な本文の展開過程をたどるべき材料がなかった。もし、ここで想定された「イ」本のような、重複歌、重複場面を有するテキストの存在が考えられるならば、諸本の展開過程をたどることは、もっと容易になるのではないかとおもうのである。

しかし「イ」本はさておいても、甲南本にはなぜ千種本系の他本にはない独自の本文が多いのであろうか。それは甲南本が、十行古活字本の本文をとりいれている点に起因してゐると考えられる。今千種本系の他本にはない独自の本文で分量の多い六箇所をとりあ

げ、それを十行古活字本とくらべてみると、そのことごとくが一致しているのである。単に本文が一致しているだけであるならば、甲南本が千種本系と十行古活字本との中間的性格を有するものとして、考えられてしまふであろう。しかしその六箇所の中には

〔甲〕 初こゑはけふそきよつる鶯の谷たちいてよいくよへぬらん

イ無

といひけち給ければ少将いよ／＼のひかたきくるまのきはにたちより給ひてあくかれさせ給らんかひも侍らしと聞ゆれば中の君車よりは少将殿の一所こそおりさせ給つれよの人はいつかはしりたりかほにももの給物かなといへは少将うちわらひてゆゑしき御物あらそひかないかなるよめにもこそはしるく侍なれ御くちきよさよいかに兵衛のすけとのに物あらかひのあるらんうしろめたさこそなとたはふれ給ひけるもたよみきみにこそけしきは見え給ひにけり少将とのたひ／＼歌よみ給なとしたまひけりさても日くれぬればみな／＼帰り給ひて

〔古活〕

手もふれてけふはよそにて帰りなんひとみの岡のまつつつ

らさよ

と云けち給ければ少将いよ／＼忍ひかたさにくるまのきはに立より給ひて何隠させ給ふらんかひも侍らしときこゆれば中の君車よりはせうしやう殿のひとところこそおりさせ給つれよの人はいつかはしりたりかほにももの給物かなといへは少将うちわらひてゆゑしき御物あらそひかな御口きよさよいかに兵衛のすけ

とのに御物あらかひのあるらんうしろめたさこそなとたはふれ  
給けるも只ひめきみにこそとけしきはみ給ひにけりせうしやう  
とのたひく／＼哥なとよみ給ひけり

としをへておもひ初てしかた岡のまつのみとりはいろふかく  
見ゆ

のように、その位置が一致しない場合がある。右の例について見る  
と、十行古活字本では「と云けち給ければ」は直前の姫君の詠歌「  
手もふれでふはよそにて帰らん」をうけて、まったく矛盾なく  
つづいている。しかし甲南本では場面の最後であって、少将の詠歌  
「初こゑはけふぞきゝつる」につづいて「といひけち給ければ少将  
……」とあるので、どう考えても不自然なのである。これは明らか  
に、甲南本が十行古活字本の本文をとりいれたと考えるべきケース  
であって、その逆の展開過程は考えられない。

おそらくは、重複歌や重複場面についても、甲南本以前に、明日  
香井本や「イ」本の祖本が十行古活字本（ないしは同系の本）との  
接触によって、少しずつ段階をおって生じてきた矛盾点ものではあ  
るまいか。Aの書陵部本と十行古活字本とを比較すると、両本には  
最初から親近性があることはたしかである。しかし千種本系がAB  
Cと展開して行くにつれ、ますます十行古活字本に近似して行く傾  
向があるのは、絶えざる接触が親近性近似性の度を増したにすぎ  
ないとおもうのである。

こう考えると、千種本系と古活字十行本とはそれほど接触する機

会があつたか、また、少しずつ本文をとりいれるなどという校合な  
いしは書きこみの方法があり得るかという点で、新たな疑問が生ず  
るかも知れない。

だが千種本系の諸本は、その奥書を信ずれば、江戸初期千種家飛  
鳥井家という宮廷人の家に伝来する本から転写されてきたものであ  
つた。十行古活字本にしても、「住吉物語依少人御所望以祕本興行  
也」という奥付から、教養人の家につたわった一本から板行された  
ものとおもわれる。甲南本には、その伝来を知るべき何のてがかり  
もないが、やはり千種本系や古活字本とテキストの流布圏享受圏を  
同じくしていた時期があり、その時期に他本と接触したものである  
う。

その他本の一つ「イ」本との校合がかならずしも厳密でないこと  
は、さきにも触れたが、その厳密でない理由は、校合が、校合者の  
解釈による異文の選択でしかないからである。地の文よりも歌詞の  
異文校合に綿密であることは、すでに指摘したが、そのほかに目立  
つ点としてたとえば、

【書】あまきみいそきいてひめきみはこれにおはすなりしゅうはあ  
はれとはおもひたてまつれともわかき物にてうはのそらに申て  
候

【甲】あま君いそぎ出て聞ゆるやう姫君もこれにおはすなり侍従あ  
はれとはみ奉りなからわかき者にてうちはなちに申て候  
うはの空にイ

〔古語〕 あま君いそぎ出て聞ゆるやう姫君も是におはしますになん侍従哀とは見奉りなからわかき物にてうちはなちに申けるにこそ

において、校合者（「イ」本の校合は甲南本の本文と同筆であり、その書写の様子では、すでにその親本に存していたものようである。したがって甲南本の筆者とは別人である）は「聞ゆるやう」とか「み奉りなから」とかに対する書陵部本の異同——「イ」本も書陵部本と同じ本文だったとして——には、校合することをせず、「うちはなちに」だけ異文を記したのであろう。それは尼君のことはの中で「うちはなちに」という副詞だけが、妙に王朝的古典的でないひびきをもっていることに気づいての、選択意識がはたらいたからにちがいない。もちろん「うはの空に」という「イ」本本文にしても、校合者の古典語をのぞむ心理を満足させ得るものではあるまいが、異文があるという点で安心できる体のものであったらう。

はしめよりおはりまでの事ともかきくときつゝかたり給ひて  
大将との物まいりのつゐてにもとめあひて

など、いずれも語彙の新旧にかかわる感覚がはたらいた校合箇所とおぼしい。

またその校合者は

〔書〕 なかのきみをり給さくらかさねのうへにこきあやのうちきあ

をきおりものゝひとへに御はかまふみくゝみさしあゆみたまふ  
〔甲〕 中の君おり給へり紅梅のうへにこきあやのうちきあをきおり物のひとへに御はかまふみくゝみさしあゆみ給えるさま

〔古語〕 中の君おり給へりこうはいのうへにこきあやのうちきき給へりさしあゆみ給へる様

のように、有職にかかわる異同を見落さない人であった。

しんてんのすのこにるたまへるを  
すみに月かけのきちやうあしつかはしくしつらひてみたまへ  
もやのみすにくちきかたの経かたひらかけていとあるへかしく  
り中將イ本  
しつらひり

など、同一の意識によってとりあげられた異文の校合である。

かかる校合の方法は、積極的な改変をとまなう物語本文流動期のあとにきた傾向として考えられ、また校合者も、おのずからその階層が限定されるものである。甲南本の伝来を、江戸初期官廷人の家という流布圈享受圏とむすびつけて考えるに、まことにふさわしいのである。

以上、粗雑な紹介であるが、甲南本の解説をおえたい。最後に、同本の存在を教えて下さった片桐洋一氏、閲覧の便をはかって下さった森一郎氏、解説文執筆の機を与えて下さった甲南女子大学国文研究室にあつく御礼申し上げる。

# 昭和四十年年度卒業生特殊研究題目

新聞文章の性格  
小説における表現効果

竹之上 恵美子

漱石研究ノート―「こころ」をめぐって―

堀辰雄と室生犀星―かげろふの日記―

源氏物語における女房の役割

樋口一葉研究

「寝覚上について」―夜の寝覚の主題をめぐって―

千利休論

「浮雲」をめぐって

山本有三論

―戯曲家としての有三、及びその初期の作品―

一葉の作品に見える明治語の研究

明石上論

平家物語の研究

短歌研究

島崎藤村研究「破戒論」

一説 当世書生気質の成立をめぐって

日本紀行文学の研究

和泉式部日記の研究

川端康成研究

―「伊豆の踊子」の成立をめぐって―

源氏物語の「笑ひ」―末摘花と近江君―

談話の表現効果

近松の作品に封建社会への抵抗をみるべきか

―世話物を中心として―

落語の「オチ」の研究

国木田独歩論

宮沢賢治の童話研究

紫上論―その女性像の本質―

源氏物語における女房の役割―その心情と行為―

近代文学研究ノート―透谷から藤村へ―

光源氏と紫の上との愛の構図

能楽における女性像

漱石研究ノート―三部作を中心に―

諸道聽耳世間猿の研究

宇治の女君―浮舟の造型―

近松の作品における時代物と世話物との比較研究

大衆文学の研究

明治初期における言文一致運動

外来語研究

岡本かの子研究

淡路方言の研究

一茶の句の平俗価値について

―芭蕉の句と比較しつつ―

歌合における判詞の研究

「浮舟論」―女性の宿世―

秋田「なまはげ」行事の研究

川柳の研究―貞門俳諧と比較しつつ―

二条派の歌風の研究―愚問賢註を通して―

芦田 真耶

石井 恵美子

石井 高子

石丸 麻子

入谷 博子

上島 弘子

大庭 美代子

小田 尚代

掛川 寿子

近藤 栄子

勝間 若子

金沢 恵子

川村 信子

岸科 篤子

北川 隆子

木村 哲子

木村 博子

越田 宏子

佐伯 公子

下平 欽子

住江 和子

多田 綾会子

田中 昭子

田中 くらみ子

中井 賀代子

中川 佳子

長坂 喜子

丹羽 富子

沼田 美紀子

野瀬 史子

橋本 寿子

畑 とも子

福盛 憲子

藤原 信子

堀 玲子

松下 佳江

鞠山 佳江

三島 セツ

山田 時子

山田 範子

山本 順子

米山 礼子

脇 登茂子

鷺尾 紘子